

伊勢物語の歌の伝承性

—天福本第十四段の場合—

森 本 茂

一

伊勢物語の中の歌には、古歌集などと深い関係を持つものが多い。かつて福田良輔氏の調査されたところによると、^{注1}伊勢物語の歌のうち、万葉集と同歌・類歌・同系統歌にあるものは五十五首にのぼり、伊勢物語全歌数の約四分の一に当たる。伊勢物語の歌は万葉集に限らず、記紀歌謡や古今集などの勅撰集にみえる歌と同歌・類歌のものが多く、それらの歌が古くから民謡として歌われたものもあつたようである。こういう伝承性をふまえて伊勢物語の歌を理解し、伊勢物語の各段の文芸性を論ずることが大切であると思う。私はこういう点に注目して、かつて二、三の稿を発表したことがあるが、^{注2}本稿でも同じ立場に立って、伊勢物語第十四段（天福本）の歌三首に関する伝承性について述べてみたいと思う。

伊勢物語第十四段の全文は次の通りである。

伊勢物語の歌の伝承性

むかし、をとこ、みちの國にすゞろに行きいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにや覚えけん、せちに思へる心なんありける。さて、かの女、

中く戀に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり歌さへぞひなびたりける。さすがにあはれとや思ひけん、いきて寝にけり。夜深く出でにければ、女、

夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる

といへるに、をとこ、京へなんまかるとて、

栗原のあれはの松の人ならば都のつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて、「思ひけらし」とぞいひ居りける。

（日本古典文学大系本）

二

まず「中く」に戀に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかりの歌についてみる。この歌の類歌は万葉集に次のようにある。

三六 なかなか人にあらずは桑子にもならましものを玉の緒ばかり

(新訓万葉集・以下同)

(卷十二・寄物陳思)

万葉集卷十二の中に、民謡性を持つ口誦歌が混入しているとみるのは今日の定説である。^{注3}たとえば「寄物陳思」の中の二九六四番から三一〇〇番の歌はみな恋歌であり、地名とか素材に地方的なものが多く一読してこれらの歌が民謡であったろうと感じさせる。しかし森本治吉氏が、「卷十一・十二のうち本来の口誦文学と記載文学とを一一の具体例に就て差別する事は、今日殆ど不可能である」と述べられたように、「——國の歌」とあるものを除いて、どの歌が民謡でありどの歌が民謡でなかったということを判別することはひじょうに難しい問題である。

しかしながら、「なかなか……」の万葉歌は次に述べる点からして、多分に民謡性を持つ歌であると思う。

いったいに万葉集には、「なかなか人にあらずは……にならましものを」とか、「……に戀ひつつあらずは……にならましものを」という形、あるいはこの変形をとる類歌がひじょうに多い。

太宰師大伴卿、酒を讀むる歌

三三 なかなか人にあらずは酒壺になりてしかも酒に染みなむ

(卷三・雑歌)

三七 なかなか人に君に戀ひずは比良の浦の白水郎ならましを玉藻刈りつつ

或本の歌に曰く

なかなか人に君に戀ひずは留牛馬の浦の海人ならましを玉藻刈る刈る

(卷十一・寄物陳思)

六 かくばかり戀ひつつあらずは高山の岩根し枕きて死なましもを

(卷二・相聞)

弓削皇子、紀皇女を思ほす御歌

三 吾妹子に戀ひつつあらずは秋萩の咲きてちりぬる花ならましを

(卷二・相聞)

神龜元年甲子冬十月、紀伊國に幸しし時、從駕の人に贈らむが爲に、娘子に詠へらえて作れる歌一首并に短歌

笠朝臣金村

五四 (長歌略)

反歌

五四 後れめて戀ひつつあらずは紀の國の妹背の山にあらましもを (卷四・相聞)

大伴宿禰家持の歌一首

三七三 かくばかり戀ひつつあらずは石木にもならましものを物思はずして

(巻四・相聞)

天皇に獻れる歌

大伴坂上郎女、春日の里にありて作れり

三七六 外にゐる戀ひつつあらずは君が家の池に住むとふ鴨にあらましを

(巻四・相聞)

諸人の梅花の歌に和へ奉る、一首

八四四 後れるて長戀せずは御園生の梅の花にもならましものを

(巻五・雑歌)

花に寄する

三三三 長き夜を君に戀ひつつ生けらずは咲きて散りにし花ならましを

(巻十・秋相聞)

二六三 かくばかり戀ひつつあらずは朝に日に妹がふむらむ地ならましを

(巻十一・寄物陳思)

二七三 白波の來寄する島の荒磯にもあらましものを戀ひつつあらずは

(巻十一・寄物陳思)

三〇三 後れるて戀ひつつあらずは田子の浦の海人ならましを玉藻刈る刈る

(巻十二・悲別歌)

これらの歌を通してみると、そうなりたいと願う対象は、「酒壺」(三四三)、「白水郎」(二七四三)、「秋萩の花」(二二〇)、「妹背の山」(五四四)、「石木」(七三二)、「鴨」(七二六)、「梅の花」(八六四)、「花」(二二八二)、「地」(二六九三)、「荒磯」(二七三三)、「海人」(三二〇五)などであり、多くは自然物である。

またこのような発想は、「もし……であつたら」「かりにその物であつたらよいのに」というふうには、現実には不可能なことであるがその実現を仮想したり、あるいは希求したりする意識と表裏の關係にあり、両者の根源は同じであるといえよう。こういう歌は次のようである。

笠女郎、大伴宿禰家持に贈れる歌一首

二六六 朝ごとにわが見る屋戸のなでしこの花にも君はありせぬかも

(巻八・秋相聞)

二六三 人言の繁かる時に吾妹子し衣にありせば下に著ましを

(巻十二・寄物陳思)

二六四 かくのみにありける君を衣にあらば下にも著むとわが思へりける

(巻十二・寄物陳思)

三三六 かく戀ひむものと知りせば夕置きて朝は消ぬる露ならましを

(巻十二・寄物陳思)

こういう歌においても、なりたいと願う対象は自然物が多い。

以上のように、なりたい対象に自然物を選ぶという傾向は万葉人の特徴であるが、それは万葉人が自然物をわが身の分身であるかのように考えていたからであろう。^{注5}

また右の類歌をみると、自分の思いを述べるのに「正述心緒」の形をとらず、「寄物陳思」の形をとっていることに注意しなければならぬ。「寄物陳思」方法は、「正述心緒」の方法よりも即物的・具体的であり、前時代的な素朴な発想といえるであろう。^{注6}そして物に寄せるのであるから、その物を入換えさえすれば、他の場所や他の場合にも歌うことのできるという性格、すなわちきわめて流動的・民謡的な性格を持っている。このことの例証として最適の歌は、前に示した二七四三番の歌である。二七四三番で「比良の浦の白水郎ならましを」とあるのに対して、「或本」には「留牛馬の浦の海人ならましを」とある。比良の浦は滋賀県滋賀郡志賀町南小松・木戸付近の湖岸をいい、留牛馬の浦は兵庫県相生市那波の海かといわれる。^{注7}つまりこの歌の第三句は、比良の浦地方で歌われる時は「比良の浦」となり、留牛馬の浦地方で歌われる時は「留牛馬の浦」と歌われたことを示すと思われるし、地名を変えて他の地方でも歌われた可能性がある。つまりこの歌は民謡であつたらうと考えられる。

そしてこの歌に限らず、三〇八六「なかなかに人とあらずは桑子にもならましものを玉の緒ばかり」の歌やその類歌も、多少の差はあっても民謡的性格を持っていたらうと想像される。伊勢物語の「中く……」の歌もこれらの歌の一つとして民謡的であるといえるであろう。

ところで、万葉集と伊勢物語の「なかなかに……」の歌は、東北・東海道地方の養蚕地に伝わる民話と大いに関連がある。関敬吾氏の「日本昔話集成」(第二部・本格昔話)には、「蚕神と馬」「蚕由来」という民話を載せている。「蚕神と馬」は「美しい娘が厩に入って毎日馬の世話をしているうち、馬に恋をされ、この世でいっしょになれないので昇天して蚕になった」という筋書の話であり、今日、岩手県(二戸郡・下閉伊郡・上閉伊郡)・福島県(雙葉郡)・山梨県(西八代郡)・静岡県(浜松市)に伝わるという。「蚕由来」は「美しい娘が継母に家を追出され、桑の木で作った丸木舟で常陸国の海辺に寄せられ、そこである爺婆に助けられた。まもなくその娘が死んだので棺桶に入れたところ、娘は蚕と化し、桑の葉を与えると繭を作った。そこで爺婆はその繭から多くの絹をとって豊かに暮した」という筋書の話であり、山梨県(西八代郡)・岩手県(下閉伊郡)・長野県(南安曇郡)に伝わるという。

また「伊勢物語抒海」は「中く……」の歌の注に次のように記している。

桑子の契りふかき物なりと云事、むかし高辛氏の時、人の娘に家に飼ける馬の心をかけけるを、その馬をころして、皮をはりてをきけるに、その皮、かの娘をとりてまきてつりけり。其後に桑の木のみくだりて、虫となりて、蚕をつくりける事あり。

「高辛氏」については「左氏會箋」に「高辛氏有才子八人。高辛氏帝之號也。」(第九・文十八)とあり、「正字通」に「魯八人亦其苗裔也。」(第九・文十八)とあり、「正字通」に「魯又帝魯高辛氏之號、別作『皓』とあり、中国の古代帝王高辛の号で

あることは明らかであるが、「伊勢物語抒海」に示した民話の出典は明らかでない。しかしながら古代中国においても、わが国の養蚕地に伝わる民話とよく似た伝承があったという点に注目しなければならぬ。

養蚕のことは中国の「礼記」に、

季春月、后妃齋戒、親東向_レ桑、以勸_二蠶事_一。

とみえるし、わが国では古事記の五穀起源説話で、殺された大気津比賣神が生まれ変わった姿を次のように記している。

於_レ頭生_レ蠶、於_二二目_一生_三稻種_一、於_二二耳_一生_レ粟、於_レ鼻生_二小豆_一、
於_レ陰生_レ麥、於_レ尻生_二大豆_一。

(上・日本古典文学大系本・以下同)

これが日本書紀になると、

唯_レ有_二其神_一之頂_一、化_二為牛馬_一。顛_上生_レ粟、眉_上生_レ蠶、眼_中生_レ稗、
腹_中生_レ稻、陰_生麥及大小豆_一。

(神代上・日本古典文学大系本・以下同)

とあり、さらにその次に、

又_レ口裏含_レ蠶、便得_レ抽_レ絲。自_レ此始有_二養蠶之道_一焉。(神代上)

こういう記載からみると、蚕や牛馬は五穀とともに生活の重要な部分を占めていたと思われるし、「口裏含_レ蠶、便得_レ抽_レ絲」は製糸過程の素朴な姿をしのばせる。また古事記で、仁徳天皇の妃奴理能美の養う虫を次のように記している。

奴理能美之所_レ養_二蟲_一、一度_為匍_レ蟲_一、一度_為鼓_一、一度_為飛鳥_一、
有_二變_三三色_一之奇蟲_上。

(下)

この三色の虫について、本居宣長は蚕ではないとみるが、鑄方貞亮^{注9}のように蚕とみる方がよいと思う。つまり、蚕が幼虫から繭・蛾となる様をいっていると考えられる。

日本書紀の仁徳紀・三十年十一月七日の条には、仁徳天皇が桑の木をご覧になって詠まれた長歌があるし、日本書紀雄略紀の六年三月七日の条には、雄略天皇が后妃に蚕を飼わせられることもある。また同じく雄略紀に、

十六年秋七月、詔_レ宜_レ桑國縣殖_レ桑。又散_二遷秦民_一、使_レ獻_三庸調_一。

とある点からみると、成育に適した国には積極的に桑の木を植えさせていることがわかる。前述の仁徳妃奴理能美は「筒木韓人、名奴理能美之家」(下)とあるし、雄略紀で秦氏が養蚕にたずさわっていることなどからみると、帰化人の多くは養蚕をしたのではなかったかと思われる。

さて雄略紀によって、養蚕が国家的意図のもとに進められたと推定できるのであるが、その目的は絹・緇・糸・綿などを紡織して調として献上させるところにあった。このことは「賦役令」冒頭に、「凡調絹緇」とあるのによっても想像できる。

奈良時代から平安初期にかけて、桑作はしだいに広い地域にわたって行われていくが、日本後紀の延暦十五年十一月乙未の条には、次のような記載がみえる。

遣_二伊勢、參河、相模、近江、丹波、但馬等国婦女各二人於陸奥國_一、教_二習養_一□、□^{注10}以_二三年_一。

(巻五)

伊勢物語の「中く」に……」の歌は、みちの国で或る女が詠んだも

のであるが、右の日本後紀からすると、みちの国に養蚕が入ったのは延暦十五年ということになる。

ともかくこうして陸奥の農民たちは養蚕の技術を覚えたようであるが、じつはその絹は中央貴族の衣料として献上するための物であり、みずからが絹の衣に手を通すなどということはできなかったようである。これは万葉集の次の歌からも推定できる。

三三〇 筑波嶺の新桑蠶の衣はあれど君がみ衣しあやに著ほしも

(巻十四・東歌・常陸國の歌)

また万葉集には次のような歌もみえる。

三三〇 たらちねの母が養ふ蠶の繭隠りこもれる妹を見むよしもがな

(巻十一・寄物陳思)

三三二 たらちねの母が養ふ蠶の繭隠りいぶせくもあるか妹にあはず

(巻十二・寄物陳思)

三五六 あらたまの年は來去きて 玉づさの 使の來ねば 霞立つ

長き春日を 天地に 思ひ足らはし たらちねの 母が養ふ
蠶の 繭隠り 氣衝きわたり わが戀ふる 心のうちを 人
にいふ ものにしあらねば 松が根の 待つこと遠み 天傳
ふ 日のくれぬれば 白たへの わが衣手も とほりてぬれ

(巻十三・相聞・よみ人しらず)

三首とも「たらちねの母が養ふ蠶の繭隠り」という同句を詠み込んでいる。これは人に知られずにいる状態とか、うち明けがたい胸の思いを表わす場合に、蚕の蛹や蛾が繭にこもることにとえて述べたも

のであろう。

また、蚕の雌雄は同じ繭にこもるものであるから、成らぬ恋の嘆きという場合に「桑子」に托して述べ、表現上では「なかなか人とあらずは……にならましものを」とか「……に戀ひつつあらずは……にならましものを」とかいう伝統的な類型を借りて歌が作られた。こうしてできた歌が万葉集の「なかなか人にとあらずは桑子にもならましものを玉の緒ばかり」とか、伊勢物語の「中く／＼に戀に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり」とかいう歌であったとみられる。したがって両歌は、本歌と改作歌とみるよりも、異伝歌とみる方が適当であろうと思う。

民謡とは、農民とか漁民とかの或る生産集団の共通感情を歌にして表わしたものである。するとこの両歌は、陸奥の養蚕地方で蚕を飼う貧しい農民の少女たちの恋の嘆きを歌ったものであつたろうと思われ、長い伝承性のしのばれるものといえるであろう。

三

次に「夜も明けばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」の歌について伝承性を考えてみたい。「きつにはめなで」の箇所は、古来難解なところとされている。「きつにはめなで」はおそらく「きつにはめなむ」の誤写であろうが、「きつにはめる」とはどういう意味なのか。「狐に食わせる」とみる説と「水槽にひたす」とみる説¹²とあるが、今はこの点は直接に関連を持たないから触れな

い。この歌では「くたかけのまだきに鳴きてせなをやつる」に伝承性が感じられる。

この部分に関する類歌は、まず古事記に次のようにみえる。

此八千矛神、將_レ婚_ニ高志國之沼河比賣_ニ、幸行之時、到_ニ其沼河比賣之家_ニ、歌曰、

夜知_ハ富_コ許_コ能_ハ 迦_ハ微_シ能_シ美_シ許_コ登_ハ波_ハ 夜_ハ斯_ハ麻_ハ久_ハ爾_ハ 都_ハ麻_ハ岐_ハ迦_ハ泥_ハ豆_ハ 登_ハ富_コ登_ハ富_コ斯_ハ 故_ハ志_ハ能_シ久_ハ邇_ハ邇_ハ 佐_ハ加_ハ志_ハ賣_ハ遠_ハ 阿_ハ理_ハ登_ハ岐_ハ加_ハ志_ハ豆_ハ 久_ハ波_ハ志_ハ賣_ハ遠_ハ 阿_ハ理_ハ登_ハ伎_ハ許_ハ志_ハ豆_ハ 佐_ハ用_ハ婆_ハ比_ハ爾_ハ 阿_ハ理_ハ多_ハ多_ハ斯_ハ 用_ハ婆_ハ比_ハ邇_ハ 阿_ハ理_ハ加_ハ用_ハ婆_ハ勢_ハ 多_ハ知_ハ賀_ハ遠_ハ母_ハ 伊_ハ麻_ハ陀_ハ登_ハ加_ハ受_ハ豆_ハ 淤_ハ須_ハ比_ハ遠_ハ母_ハ 伊_ハ麻_ハ陀_ハ登_ハ加_ハ泥_ハ婆_ハ 遠_ハ登_ハ賣_ハ能_ハ 那_ハ須_ハ夜_ハ伊_ハ多_ハ斗_ハ遠_ハ 淤_ハ首_ハ夫_ハ良_ハ比_ハ 和_ハ何_ハ多_ハ多_ハ勢_ハ禮_ハ婆_ハ 比_ハ許_ハ豆_ハ良_ハ比_ハ 和_ハ何_ハ多_ハ多_ハ勢_ハ禮_ハ婆_ハ 阿_ハ遠_ハ夜_ハ麻_ハ邇_ハ 奴_ハ延_ハ波_ハ那_ハ伎_ハ奴_ハ 佐_ハ怒_ハ都_ハ登_ハ理_ハ 岐_ハ藝_ハ斯_ハ波_ハ登_ハ與_ハ牟_ハ 爾_ハ波_ハ都_ハ登_ハ理_ハ 迦_ハ祁_ハ波_ハ那_ハ久_ハ 宇_ハ禮_ハ多_ハ久_ハ母_ハ 那_ハ久_ハ那_ハ留_ハ登_ハ理_ハ加_ハ 許_ハ能_ハ登_ハ理_ハ母_ハ 宇_ハ知_ハ夜_ハ米_ハ許_ハ世_ハ泥_ハ 伊_ハ斯_ハ多_ハ布_ハ夜_ハ 阿_ハ麻_ハ波_ハ勢_ハ豆_ハ加_ハ比_ハ 許_ハ登_ハ能_ハ 加_ハ多_ハ理_ハ其_ハ登_ハ母_ハ 許_ハ遠_ハ婆_ハ (上)

この歌に続いて沼河比賣の返歌があり、さらに八千矛神(大國主神)は嫡后須勢理毘賣命の嫉妬にあい、二人の贈答歌がある。そして須勢理毘賣命のことばの終りに「登_ト與_ト美_ト岐_ト 多_ト且_ト麻_ト都_ト良_ト世_ト」(豊御酒奉らせ)とあるところからみると、これらの歌は饗宴の席で歌われ、かつ動作を伴ったものであったろうと思われる。また神語も天語歌も「許_コ遠_コ婆_コ」(是をば)で終るのは日本書紀にはみられない特有のもので、語りごとの形式を伝えたものといわれる。また土橋寛氏は「阿_ア麻_マ波_ハ勢_セ豆_ツ加_カ比_ヒ 許_コ登_コ能_ネ 加_カ多_タ理_リ其_シ登_ト母_モ 許_コ遠_コ婆_バ」(天馳使事の語事も是をば)は、「海人部出身の駆使が『海人使』であろう」「海人駆使が、この

物語を語り言としてお話し申します、の意。歌の最後に、それが海人部の物語であることを明らかにした語」とされる。注15

また万葉集には、次のような類歌もみられる。

三二〇 隱國の 泊瀬の國に さ結婚に わが来れば たなぐもり

雪はふり來 さぐもり 雨は降り來 野つ鳥 雉はとよみ

家つ鳥 鶏も鳴く さ夜は明け この夜は明けぬ 入りてか

つ寝む この戸開かせ

(卷十三・柿本朝臣人麻呂の集の歌) 注16

この歌によく似たものは記紀にもみられるが、これらは要するに求婚の歌謡であって、歌われかつ動作を伴ったものであったろう。

なお、右以外には次のような類歌もある。

二〇〇 あかときと鶏は鳴くなりよしゑやしひとり寝る夜は明けば明

けぬとも

(万葉集・卷十一・寄物陳思・よみ人しらず)

薄媚狂鶏、三更唱_レ曉_ト。

くたかけはいづれの里をうかれきてまだ夜深きに八聲なくら

ん

(夫木抄・卷二十七・鶏・前大納言忠良卿)

以上の類歌を通してみると、「かけ鳴く」は本来は鶏が夜明けを知らせることであつたが、後には求婚の目的がまだ達せられていないのに、早くも朝になったことを知らせるものであり、求婚者にしてみれば具合の悪いことであつた。そのことを詠み込んだ求婚の歌が、古事記では海人部の物語となり、万葉集では山国の物語となつて、各地方

で宴会の席で民謡として歌われ、かつ舞われたものであったろう。

また古事記で朝を告げる鳥が鶴・雉・鶏であったのに、万葉集では雉と鶏になり、伊勢物語と夫木抄では鶏だけになるといふことは、生産生活に近い鳥が文学の対象として限定されてきたことをしのばせ、ここにも伝承流布の一端をうかがうことができる。

伊勢物語の歌の「くたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」は、以上のような伝承に基づく発想であった。第十四段において通つてきた男が早く女のもとを去るのは、ほんとうは男が女の無教養さにあきれて帰るのであるが、悲しいかな女はそれに気づかず、「くたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」と思つている。女のあわれがよく描かれていると思う。

四

次に「栗原のあれはの松の人ならば都のつとにいざといはましを」の歌の伝承性について考えてみたい。「あれは」とあるのは天福本以外では、流布本系の千葉本、古本系の承久本・泉州本・藤房本・武者小路本などであり、他系の諸本には「あねは」とある。宇津保物語の初秋の巻に「きく人はあねはの松の風なれやむかしのこゑを思ひ出づるは」（諸本同）とあるし、夫木抄に「ふるさとの人にかたらんくりはらやあねはの松の鶯のこゑ」（巻二十二・原・鴨長明）、「かくばかり年つもりぬる我よりもあねはの松はおいぬらんかし」（巻二十九・松・祐挙）、千五百番歌合に「栗原のあねはの松を誘ひても都はい

つとしらぬ旅かな」（季能卿）とあるし、今日、宮城県栗原郡金成町に「姉齒」という地名が残っている点などからみて、「あれは」は「あねは」とある本文に従うべきであろうと思われる。

ところでこの歌の類歌に、古今集の東歌「小黒崎みつの小島の人ならば都の苞つとにいざといはましを」（巻二十）がある。両歌の下句は同じで、上句の地名だけが異なる。こういう歌は各地方で上句におのが地名を詠み込んで歌われたものであったらうと考えられる。

こういう歌の発想はそうとうに古く、古事記にさかのぼる。それは古事記の中の倭建命の絶唱「袁波理邇 多陀邇牟迦幣流 袁都能佐岐那流 比登都麻都 阿勢袁 比登都麻都 比登邇阿理勢婆 多知波氣麻斯袁 岐奴岐勢麻斯袁 比登都麻都 阿勢袁」（中）である。ここにいう「袁都能佐岐那流 比登都麻都」（尾津の崎なる一つ松）は、美濃から伊勢に向かう交通路にあるもので、旅人はその一本松を愛して右のように歌つたのであろう。この長歌は倭建命の思国歌となつて注¹⁷いるが、本来は思国歌とは関係なく、素朴な民謡であつたにちがいない。この点については高木市之助氏が次のように述べておられる。

恐らくこの一本の老松は、彼等のあこがれの尾張に向つて、指すが如く教ふるが如くにその枝幹を向けてゐたであらう。単純な古代人はかうした場合、この尾張に対する愛着をこの一個の植物に移す事が出来たにちがひない。而かもこの愛着は、すべてを擬人する彼等にとつては、直ちにきぬきせましを太刀はけましをと呼びかけずにはすまされなかつたであらう。かういふ風に想像してこそ（仮令それは想像に過ぎなくとも）、一つ松に対する初心素朴な古代人の

心が始めて生動するのではなからうか。誰かが樹下に太刀を忘れて行かうが、さうしてそれが再び出て来ようが、それは歌の原型的な意味とは何の交渉もないことである。

(吉野の鮎・八十三頁)

さて以上のようなところに「栗原の……」の歌の発想はさかのぼることができると思うが、古今集東歌の「小黒崎……」と並べてみてすぐわかるように、両歌は「……の人ならば都のつとにいざといはましを」という共通句を持っている。その句の上に地名とか、その地方で他に誇りうる歌枕的な物を冠しさえすれば、その地方の民謡としてりっぱに完成するというものである。

このことは伊勢物語第十四段からも推測できる。すなわち、「栗原の……」の歌の次に「……といへりければ、よろこばひて、思ひけらしとぞいひをりける」とあるが、男は陸奥国の旅を終えて京へ帰ろうとするに当たって「栗原の……」という歌を女に与えたところ、女は「姉齒の松が人でないように、あなたは田舎びいて人らしくないから、京へは連れて行けない」という歌の真意を解しかね、かえって誤解して、「あの人が私を愛してくれているらしい」と思って喜んでゐる。こういう女の無教養ぶりを描いているわけであるが、この話から推測すると、都の人が地方に下り、しばらく地方にいてやがて上京する場合に、都人は「……の人ならば都のつとにいざといはましを」という体のよい挨拶の基本形の上に、その地名とかその地方の物を冠して、一首の歌として整えたものであろう。

そして地方に下った都人が地方で恋人ができ、その人と別れて上京

しなければならぬ時——本心はこれを機会に縁を切りたい時——、この基本形が好んで用いられたのであろうと思われる。地方に残された女でもちよつと教養のある者ならば、その歌の真意を理解して悲しむわけであるが、第十四段の陸奥の女は教養がとぼしかったばかりに、真意を解しないばかりか誤解して喜ぶという反対の結果を招くことになった、ここにいうにいわれぬ女の哀れが感じられる。

このようにみると、金子元臣氏が「小黒崎……」の歌について、「作者は京人であるに違ひない」と述べられたのは当たっていると
注¹⁸思う。「小黒崎……」に限らず「栗原の……」の歌も、じつは京人の詠む歌であり、京人が旅先の地名を上冠することによって別れの歌になるといふ、つまり、都人による一種の伝承歌であったとみられるのである。

五

以上、私は伊勢物語第十四段の三首の歌について、その伝承性を述べてきたのであるが、その結果、三首の歌ともその発想は平安以前にさかのぼりうるものであり、長い年月にわたって庶民の間で親しまれてきた類型によりかかっているということ、すなわち民謡的な基盤に立つものであることが想像される。

いったいに第十四段は、他の多くの段と同じく「むかし、男……」という書出しではあるが、その「男」よりも陸奥の女を描く方に重点が置かれているようである。その女の心情は、「中く〜に……」「夜も明けば……」の二首の歌でよく表われているし、三首めに「栗原の

……」という男の歌はあるが、その次の「よろこぼひて、『思ひけらし』とぞいひをりける」に至って、女の哀れは最高潮に達している。つまりこの段は、「京の人」を「めづらか」に思った田舎の陸奥女がくり広げるひなびた女の哀れを描くのが作者のねらいであったと思われる。その女を描くに当たって作者は、民謡的基盤に立つ類型をうまく組合せ、読者の心に生き生きと印象づけようとしたのであろう。

伊勢物語の諸段のうち、「男」が京中で行動する段は、たとえば第二段において「男」は西の京の女と語りあってわが家に帰り、「起きもせず寝もせず夜をあかしては春の物とてながめ暮らしつ」と詠み、第四段において、東五條の太后の西の対に住む女をしのんで、「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」と詠む。「男」は京中のどこへ行っても心が晴れず、まことに哀れ深い。これに対して、第十段から第十五段へかけての、いわゆる東国物語においては、第十四段にみられるように「京人」たる「男」と「田舎女」を対照させ、女の哀れを描き、逆に京人たる「男」の方にはその矜持さえも感じられる。東国物語においてわれわれは、田舎女の哀れに同情の念を催すとともに、京人たる「男」の意気に驚かされる。

たとえていえば、京にいる時の「男」は生簀いさすの中の魚であり、田舎にいる時の「男」は大海を遊泳する魚である。伊勢物語に描かれたこのような「男」の二面性こそ、平安の貴族社会に生きる者の宿命的性格であったと思われる。

(了)

注1 福田良輔氏「伊勢物語の民謡性」(古代語文ノート)

2 拙稿「伊勢物語『筒井つのだ段』の構成」―伝承性を中心に―(論究日本文学・第三十一号)、「伊勢物語の伝承性」(大阪私立短期大学協会・昭和四十二年度研究論文集)

3 森本治吉氏「萬葉集大系・八」(民俗篇)の中の「柳田国男氏との対話」三六二―三六三頁、森本治吉氏「萬葉集の芸術性」四四五頁など。

4 森本治吉氏「萬葉集の芸術性」(萬葉集大系・八)四五頁。

5 津田左右吉氏「萬葉の歌人の自然に対する態度について第一にいふべきことは、自然を我が友と見、無情の生物を人と同じく有情のものとするのである。」(文学に現はれたる国民思想の研究・第一巻・二〇七頁)

6 中島光風氏「物象が介在するだけそれだけ正述心緒歌より具象性が大であると云ふ事は云へるだらう。即ち正述心緒が單純に心的事件を披瀝するに對し、之は具体的な物象を持って来て例証するのである。いはば無形的な心的事件に對し一種の枠をはめるのである。それだけ読者にわかり易くなる。」(國語と國文学・第六卷八号・寄物陳思歌の表現方法について)

7 高木市之助・五味智英・大野晋氏「萬葉集」(日本古典文学大系)の頭注による。

8 本居宣長「古事記伝」・卷三十六。
鑄方貞亮氏「日本古代桑作史」四十四頁。

10 矢野玄道「日本逸史私記」に、「疑當レ填三蠶限二字」とある。□の箇所(二か所)にはともに「蠶」の字を入れるのが適當であろう。

11 「伊勢物語愚見抄」「伊勢物語直解」「勢語臆断」など。
12 「勢語諸註參解」「伊勢物語新釋」(平田篤胤の水槽に鶏をひたす話を紹介)

13 西郷信綱氏「古事記の世界」(岩波新書)

14 三谷栄一氏「日本文学の民俗学的研究」五六二頁。
15 土橋寛氏「古代歌謡集」(日本古典文学大系)頭注による。

- 16 「柿本朝臣人麻呂の集の歌」といっても、じつは柿本人麻呂の自作歌と
いくつかの他人の歌とを集めたものであり、柿本人麻呂作と明記した歌
よりも民謡性に富む。
- 17 土橋寛氏「古代歌謡集」（日本古典文学大系・頭注）、武田祐吉氏「古
事記」（日本古典鑑賞講座）一六二頁など。
- 18 金子元臣氏「古今和歌集評釋」一〇二六頁。